学級に核をつくる

私が初任だった頃、先輩方の学級経営は神業であった。子供たちは主体的に動き、授業は発問が少なく子供同士は真剣に互いに学び合っている、学級に活気があり生徒指導上の問題も少ない。何とか自分もそんな学級経営ができないかと焦っていたものだ。

ある時、あまりにも学級経営が上手くいかず、私が子供を怒ってばかりいたのを見かねて、隣の学年主任の先生が「子供をみんな連れて、掃除の時間見学においで。」と言われ、全員の子供を連れて見に行った。どの子供も一生懸命掃除をする姿に、私も子供たちも感心し、「あんな風になりたいね、なろうね。」と、気持ちを一つにして教室に帰ってきた。

そんな、先輩方から言われた数々の言葉に支えられて今がある。

まず、「学級に核をつくる」という言葉。「国語の得意な子は国語の時間に、体育が得意な子は体育の時間に、掃除が上手な子は掃除の時間に、遊びの中心になる子は休み時間に……。その時々に活躍できる子供を輝かせてやる。学級に一人一人が輝ける場所をつくってやる」。自己有用感、自己肯定感という言葉は今や当たり前だが、その当時はそんな言葉より、実践を伴った言葉で直に教わった。もう一つ、「子供たちに『みんなのよいところをお家の人に教えるね』と言って、子供のよいところを見つけ保護者に伝える。そのことが、子供と教師、保護者と教師の信頼関係につながる」。これらの言葉は私の心にずっと息づいている。

さて、自分は？と振り返ると、そんな先輩方の足下にはまだまだ及ばない。あの頃の先輩方に何とか追いつきたいと願う日々である。